

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 14 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720158

研究課題名(和文) エミール・ゾラと写真をめぐる芸術創造の問題

研究課題名(英文) The problems of artistic creation surrounding Emile Zola and a photograph

研究代表者

高橋 愛 (TAKAHASHI, Ai)

法政大学・社会学部・講師

研究者番号：80557281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円、(間接経費) 390,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、エミール・ゾラが1888年に興味を抱き、90年代からプライベートな場面で積極的に撮影した写真を、当時の社会的、思想的コンテクストに焦点をあてて検討し、芸術創造においてこの作家が展開した持論の内実や実際に生みだされたイメージの力について考察を深化させた。私的な絆を写真によって確認し、カメラのシャッターを切り続けていた当時のゾラは、生への執着に突き動かされていた。その点を意識したうえで、ゾラの写真を小説、批評、書簡に照らして分析し、文学と写真のあいだに見られる密接な関係を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This study examines the ideological and social context of photos taken by Emile Zola in private locations, after he first embraced photography in 1888. More specifically, it aims to deepen the discussion on the power of images created by the facts and realities of his ideas about artistic creation. Using the photos that Zola captured continuously at the time, the study confirms an artistic and personal relationship motivated by an obsession with life. Our analysis of Zola's photos in relation to his novels, commentary and letters, therefore, reveal an intimate connection between his photos and his writing.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学(英文学を除く)

キーワード：エミール・ゾラ 写真 美術批評 『三都市』 自然主義 視覚芸術 母子像

1. 研究開始当初の背景

『ルーゴン・マッカール叢書』の刊行を通して、ゾラは19世紀後半に自然主義作家として知られるようになるが、小説の執筆とマネや印象派画家たちを擁護する美術批評家としての活動を並行していた。現実のイメージをそのまま再現する写真がフランスで広く普及する中で、多くの画家が芸術創造の在り方を問い、絵画固有の表現を発展させた。ゾラはその過程を注視する一方で、カメラの世界にも魅せられて、1890年代には積極的に写真撮影を行うようになった。

1860年代からゾラがナダール等の写真に触れていたことや、写真撮影の体験を通じてゾラが得た視覚と文学との関係などについては、これまで具体的な研究はみられなかった。実際に、19世紀における写真の受容と小説描写への影響、撮影された写真があらわすゾラの審美眼については、関連文献においてもごくわずかな記述にとどまっている。ゾラの文学と写真の関係をめぐって、その可能性は軽く示唆されるレベルで、深く考察されたことはなかった。本研究において成果が得られれば、この欠落を埋めるものと期待された。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ゾラが1888年からプライベートな場面で傾倒した写真を歴史的・社会的・文化的文脈のなかで見直し、画像を小説、批評、書簡にも照らして、芸術創造においてこの作家が展開した持論の内実、彼の時代への意識を具体的に浮かび上がらせることである。

『ルーゴン・マッカール叢書』と『三都市』の草稿・決定稿・関連資料を精査し、その作業から得られた事実とゾラの写真との比較検討を通じて、この作家における文学と写真の接点を見出すことを主な目的に定めた。ゾラによって実際に生みだされたイメージの力がいかなるものであったか、写真を通じて見られるゾラの欲求と文学創造との関係はどのように結ばれたのかを多角的な視点から明らかにしたいと考えたからである。

3. 研究の方法

上記の目的を果たすため、本研究は日本とフランスで行われた。学期中は、主に法政大学図書館のILLサービスを利用して論文を収集し、国内で入手可能な書籍を購入した。夏期休暇中は、フランス国立図書館とオルセー美術館付属図書館、ストラスブール大学付属図書館で19世紀後半の写真と絵画に関する資料を調査した。

実際の資料収集と分析は、以下の4つの行程を経て行われた。

(1) 『ルーゴン・マッカール叢書』と『三都市』の草稿分析。(2) ゾラが撮った写真の調査・分析。(3) 19世紀フランスにおける絵画と写真の相関性をめぐる調査・関連資料

の分析。(4) ゾラの小説と写真の比較検討。それぞれの行程の具体的な内容は次の通りである。

(1) 『ルーゴン・マッカール叢書』と『三都市』の草稿分析。コレット・ベッケルの監修で刊行が続いている *La Fabrique des Rougon-Macquart* (2003-) によって『ルーゴン・マッカール叢書』の草稿については、相当部分を国内で調査することができた。学期中は、Mejanes 図書館のサイトを通じて『三都市』の草稿も精査し、ゾラの写真における主題等も意識したうえで、分析を行った。

(2) ゾラが撮った写真の調査・分析。フランス国立図書館が所蔵するゾラの写真を調査し、主に万国博覧会と家族に関する画像について考察を深めた。デジタルカメラによる所蔵写真の撮影とパソコンへの入力作業によって、研究は進捗した。

(3) 19世紀フランスにおける絵画と写真の相関性をめぐる調査・関連資料の分析。第二帝政、第三共和制時代の美術史も俯瞰し、社会的、思想的コンテクストに焦点をあてて、19世紀に撮影された写真を検討した。ナダールなどの個別の作家研究については、21~23年度の科学研究費による研究において、相当の文献を収集していたが、未収集の分について、オルセー美術館付属図書館とストラスブール大学付属図書館で補完作業を行った。

(4) ゾラの小説と写真の比較検討。(1)~(3)の研究を基盤として、眼の前の現実に強い関心を寄せる観察者ゾラが写真と関わって得た視覚、その時代にゾラが抱いた想像力、写真から小説への影響、創造をめぐる問題点などをめぐって複合的に考察し、分析を深化させた。

4. 研究成果

ゾラは1888年からカメラに興味を持ち、90年代からは写真家としての新しい顔を見せるようになった。時代の証言者たる作家であったゾラは、プライベートな場面で万博会場やパリの街路などを撮り、家族写真においても、彼の鋭敏な時代感覚を明かしている。時に被写体として選ばれた積み藁や日傘を持つ女性などを見ると、ゾラの画像は、印象派絵画との照応関係をうかがわせるケースも多い。本研究においては、写真と文学作品を比較参照しながら、人間と社会を深い熟慮に基づいて描こうとした文学者ゾラの思念を丹念にたどった。

その結果、小説の草稿と決定稿および同時代の関連資料を精査する過程において、ゾラの文学と写真における興味深い接点を見出すことができた。主な成果の内容について、以下に詳述する。

(1) 文学作品とは異なり、ゾラにとって写真はプライベートな世界にとどまるもので、公に主張すべき意味を画像の中に内包する必要はなかった。しかし、ゾラと恋人ジャンヌ・ロズロとの記憶を通して画像を見直すと、それらの中には作家が文学世界で結晶化した要素がやはり潜んでいるのである。たとえば、ゾラとジャンヌが 1893 年に共有した写真をめぐる視覚体験は、『パリ』(1898)の主人公ピエール・フロマンが精神的彷徨の末に見出したものを描く場面において、その関連を指摘できる。

『パリ』において、ジャンヌから着想を得て創造された登場人物マリー・クチュリエが小説の最終部分で見せるポーズは、フロマン一家の非宗教性を表す意味でも重要である。19 世紀後半のフランスでは、母子画が非常に流行し、メアリー・カサット、モーリス・ドニ、ウジェーヌ・カリエールなどが母と子をテーマとする作品を精力的に制作していた。キャンパスの中でたえず一体化して描かれる親子の姿は、伝統的な聖母子画の影響下にあった。そして、『ルーゴン・マッカール叢書』の時代から、ゾラの小説世界における聖母子画は登場人物たちの狂信的なマリア信仰と結びついていた。『パリ』を執筆するゾラは、ジャンヌと子どもが日常的に見せていたポーズを描いて、伝統的な聖母子画の系譜から完全に離れた母子のイメージをあらわし、主人公が物語の最後に見出した労働と科学を土台とする「新しい宗教」を象徴的な形で読者に提示している。その母子の姿は、『三都市』の第一巻『ルルド』の最終章で帰路につく主人公が車窓から見た巨大な聖母像とも対比されるべきものである。

(2) 19 世紀後半のフランスで自転車に乗る多くの女性がズボンを履くようになり、それをジェンダーの侵犯、男性優位の社会に対する女性の挑戦と見なす向きが社会の中で強くなったとき、ゾラは自転車に乗るジャンヌ・ロズロの姿をさまざまな形でカメラに収めた。ジャンヌとの間に生まれた娘ドゥニーズが 10 代を迎えたときに自転車に乗せて撮った画像も残っている。こうしたゾラの写真を経史的・社会的・文化的文脈の中で見直し、当時の彼の文学的言説や新聞記事の内容に照らして分析した結果、当時のフランスにおける人口減少と国民の危機感、そうした時代の文学のあり方、家族論などをめぐるゾラの意識が浮き彫りになった。これらの結果を通じて、ゾラの文学と写真の間に見られる密接な関係を明らかにすることができた。

これらの研究成果を基に、日本比較文学会(2013 年 4 月 20 日、東京大学)と大阪大学フランス語フランス文学会(2014 年 3 月 8 日、大阪大学)で口頭発表を行った。

雑誌論文への執筆については、以下に詳述する通りである。

ゾラの写真をめぐる視覚体験と『パリ』との関係に関しては、「5. 主な発表論文等」欄に挙げる雑誌論文「ゾラ『パリ』と写真をめぐる視覚体験 窓辺の記憶からたどる母子の表象」にまとめられた。ゾラにおける自転車に乗る女性の表象については、同欄の雑誌論文「ゾラにおける自転車に乗る女『パリ』と写真をめぐる一考察」において、その分析を深化させた。これらの成果を通じて、ゾラの文学と小説の間に見られる関係について、研究上の新たな視点と分析の方法を示すことができたと思われる。

時間的な制約で、主に『三都市』を中心に論考をまとめることになった。最晩年のゾラの思想を視野に入れて『四福音書』までを扱うことはできなかったため、当時の政治的な含意と合わせて写真を検討するのは、今後の検討課題としたい。本研究では、ジャンヌ母子を被写体とした家族写真を中心に論考をまとめたが、ゾラが妻アレクサンドリーヌを撮った写真などについても取り上げて比較検討し、テーマを広げたい。

ゾラの写真体験と近代都市におけるモニュメントとの関係を発展的に考察し、2014 年度中に口頭発表および論文執筆を行う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

高橋愛、「ゾラにおける自転車に乗る女『パリ』と写真をめぐる一考察」、『武蔵大学人文学会雑誌』(武蔵大学人文学部)、46-1、2014、査読無(印刷中)

高橋愛、「ゾラ『パリ』と写真をめぐる視覚体験 窓辺の記憶からたどる母子の表象」、『GALLIA (大阪大学フランス語フランス文学会)』、53、pp. 21 - 30、2014、査読有 (<http://www.gallia.jp/>)

〔学会発表〕(計 2 件)

高橋愛、「ゾラにおける文学と写真の接点」、『大阪大学フランス語フランス文学会』、2014 年 3 月 8 日、大阪大学

高橋愛、「ゾラにおける絵画と写真の視覚体験と『パリ』」、『日本比較文学会』、2013 年 4 月 20 日、東京大学

〔その他〕

ホームページ等

法政大学学術データベース

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/26/0002582/profile.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 愛 (TAKAHASHI Ai)

法政大学・社会学部・講師

研究者番号：80557281